

メキシコ・シティ旧市街における 地区再生に向けたオープンスペース整備の 計画及びデザイン手法

西村 亮彦¹・内藤 廣²・中井 祐³・尾崎 信⁴

¹非会員 工博 メキシコ国立自治大学 建築学研究所 研究員 (CP 04510, Edificio de Posgrado de Arquitectura, Circuito Interior, Ciudad Universitaria, México, D. F., E-mail: akihiko1208@hotmail.co.jp)

²正会員 工修 (株)内藤廣建築設計事務所/東京大学 名誉教授
(〒102-0074 東京都千代田区九段南2-2-8, E-mail: naa@naitoaa.co.jp)

³正会員 工博 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 景観研究室 教授
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

⁴正会員 工修 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 景観研究室 助教
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: osaki@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

中南米最大の都市、メキシコ・シティの旧市街では、2006年末に誕生したエブラルド市政の下、広場や歩行者専用街路などのオープンスペースの整備を核とする再生プログラムが実施され、大きな成果を挙げてきた。本論文は、エブラルド市政のオープンスペース整備の計画・デザイン手法を明らかにした上で、プロジェクトの成果と課題を分析したものである。プログラム全体を通して、計画・デザインのプロセスにおいて、ACHのコーディネートの下に連携のとれた分業体制が成立していたこと、広場と歩行者専用街路を一体的に整備することで、オープンスペースのネットワークを創出したこと、ハード整備と連動してソフト面での活性化を図ったことが、事業を成功に導いた大きな要因であることが明らかになった。

キーワード:メキシコ, 旧市街, オープンスペース, パブリックスペース, 広場, 街路

1. はじめに

(1)背景

サステナブルな都市の発展は、21世紀の都市を考える上で避けて通ることのできないテーマである。その中でも、治安の悪化、地縁性の喪失、産業の衰退など、様々なインナー・シティ問題を抱える旧市街の再生は、サステナブルな都市のあり方を指す上で、最も重要な課題の一つであると言える。

近年、メキシコ、ブラジル、コロンビア、アルゼンチンをはじめとする中南米諸国の大都市では、先進諸国に遅れをとりながらも、旧市街の再生が盛んに取り組まれてきた。2010年に独立200周年及び革命100周年を迎えたメキシコの首都、メキシコ・シティでも、2006年末に知事に就任したマルセルロ・エブラルド (Marcelo Ebrard Casaubón) 知事の下で、旧市街の本格的な再生プログラムが進められてきた。その中で、広場や歩行者専用街路といったオープンスペースの整備をプログラム全体をつなぐ横断的な戦略として用い、地区の環境改善と市民生活の向上に功を奏しているのは大いに注目に値する。エ

ブラルド市政が取り組んできた一連のオープンスペース整備の内容及びその成果を検証することは、都市再生のあり方を考える上で、非常に有意義な取り組みであると言える。

(2)目的

エブラルド市政の旧市街再生プログラムの中で、オープンスペースがどのような目的の下で、どのように計画・デザインされたのか、その手法を明らかにする。また、プロジェクトが地区の環境や市民生活にどのような効果をもたらしたのか、明らかにした上で、その計画及びデザインの手法の有用性と課題を分析する。

(3)対象地概要

メキシコ・シティの起源は、1325年にアステカ族が建造した都市テノチティトラン (Tenochtitlan) に溯る。1521年にコルテス率いるスペイン軍によってテノチティトランが滅ぼされると、マジョール広場を中心とした、碁盤目状に街路が広がる植民都市がこの地に建造され、1821年に独立するまでの約300年間、スペインによる新

大陸統治の拠点として大きく発展する。独立後も、国の首都として一極集中型の発展を遂げ、都心部は国の政治・経済の中核として機能し続けた。

しかしながら、1950年代以来、メキシコ・シティの旧市街は、人口・機能の流出とともに求心性を失っていく中で、建物・インフラの老朽化、環境汚染、インフォーマル商業の氾濫、交通渋滞、治安の悪化、コミュニティの弱体化、不法占拠といった様々な問題に悩まされてきた。イギリスの地理学者、ピーター・ホール（Peter Hall）が「究極の世界都市」と称したように、こうした問題の深刻さは、他に例をみない規模であった。

1980年に国の歴史的モニュメント地区、1987年にUNESCOの世界文化遺産に登録されたことで、旧市街の歴史的環境の保存に向けた取り組みが動き出すが、一連の施策は、建物のファサード補修や遺産価値の高い建造物の修復に止まった。2000年にロペス・オブラドール（Manuel López Obrador）が知事に就任すると、ロペス市政の下で旧市街中西部の総合的な再生プログラムが計画・実施され、ようやく旧市街再生に向けた本格的な取り組みが動き出す。そして、2006年にエブラルド市政が誕生すると、ロペス市政のプログラムでは対象外とされた南部や東部、北部を含む旧市街の広範囲に渡る、総合的な再生プログラムが計画・実施された。プログラム対

象地は、19世紀までに都市化された地域である、国の歴史的モニュメント地区ゾーンA（以下、ゾーンA：UNESCOの世界文化遺産指定区域でもある）に準拠している。

2. 旧市街再生プログラムの概要

(1) 方針と戦略

エブラルド市政による旧市街再生プログラムの最大の目標は、「生きたセントロ（Centro Vivo）」、つまり人々が働き暮らすことのできる旧市街の創出である。旧市街の人口は1960年代から一貫して減少してきたが、今なおゾーンAには約31,000人が居住しており、地区住民のために都市環境の整備を行うことが一つの大きな目的とされた。また、旧市街を再生するには人口流出を止めることが不可欠と考えたエブラルドは、人口回帰を呼び起こすべく、住宅向けの投資を生むような、魅力的な都市空間の創出を目指した。そして、これらの目的を達成するには、街路や広場といったオープンスペースの整備が最も有効な手法であるとされた。

まず、プログラムを構成する根幹的なテーマとして、1) パブリックスペースの再生、2) 治安の向上、3) 観光・文化的活動の促進、4) 将来性のある持続可能な計

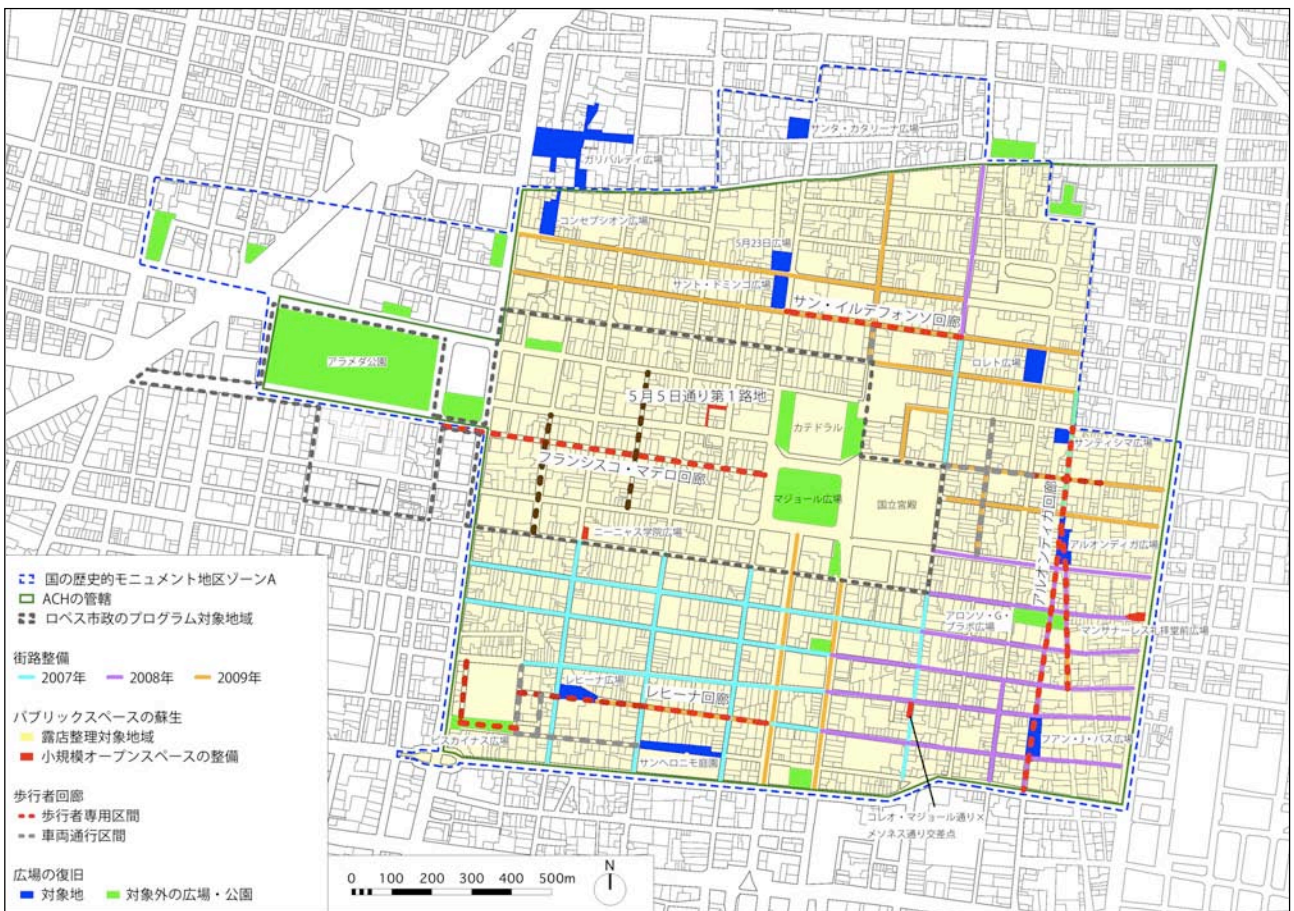


図1 メキシコ・シティ旧市街におけるエブラルド市政のオープンスペース整備プロジェクト分布図

画の策定が設定された。

次に、これらのテーマに基づき、1) 街路の再生、2) 歩行者回廊の創出、3) パブリックスペースの蘇生、4) 遺産価値のある不動産の修復、5) 夜間照明の強化、6) ファサード修復と都市景観の整理、7) 広場の復旧、8) 独立200周年広場設計コンペ、9) 清掃とメンテナンスの、9つの具体的なプロジェクトが計画・実施された。

(2) 政府部局の再編成

多岐に渡るプロジェクトを行なうにあたり、旧市街に関わる事業の計画・運営に特化した行政機関、それも知事の意向をダイレクトに反映させることができる機関が必要と考えたエブラルドは、知事に就任して間もない2007年1月、DF政府内（DF：Distrito Federal、連邦地区、行政単位としてのメキシコ・シティの名称で、通常の州に相当する）にセントロ特別局（以下、ACH：Autoridad del Centro Histórico）を設立する。

一方、ロペス市政の再生プログラムにおいて中心的役割を果たしたセントロ信託統治局（以下、FCH：Fideicomiso Centro Histórico）については、ACH設立とともに廃止が取り沙汰されたが、最終的にACHの補佐機関として存続することになった。

また、それまで土木局や都市発展局など、DF政府内の異なる行政局において別々に計画・実施されてきたパブリックスペースの整備を、一括して取り扱う機関として、2008年9月、パブリックスペース特別局（以下、AEP：Autoridad de Espacio Público）が設立された。

プロジェクトの流れは、基本的には知事の意向を受けたACHのコーディネートの下、FCHや土木局が中心となって計画・デザインを担当している。また、AEPはACHとは異なる立場から、旧市街において基幹的な3つのプロジェクトを実施している。ハード整備については、歴史的環境保全の観点から、国立歴史人類学研究所（以下、INAH：Instituto Nacional de Antropología e Historia）と都市発展局の審査が必要とされる。また、観光局や社会発展局などの機関がソフト面でのサポートを行なうとともに、FCHが整備後のフォローアップを担当している。

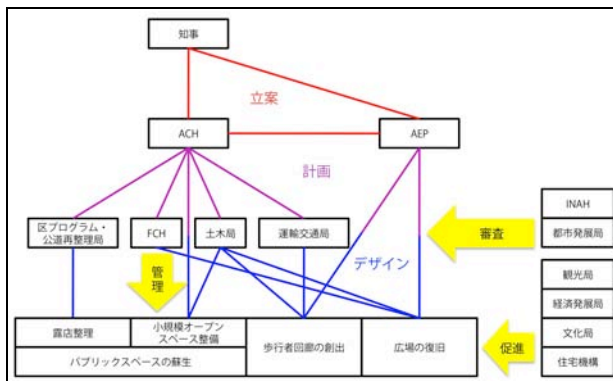


図-2 プロジェクトの流れ

3. オープンスペース整備プロジェクトの概要

エブラルド市政の旧市街再生プログラムでは、広場や街路といったオープンスペースの整備を通じた、パブリックスペースの再生が、中心的な戦略として用いられた。そこで、9つのプロジェクトの中から、とりわけオープンスペースの整備に関わりの深い3つのプロジェクトに着目し、その目的と手法、成果を明らかにする。

(1) パブリックスペースの蘇生（Rescate del Espacio Público）

a) 露店整理

エブラルドの知事就任当時、旧市街の多くの街路や広場がインフォーマルな露店によって占有されており、都市インフラを整備するにも、プロジェクトを実施することが到底不可能な状態にあった。そこで、街路や広場を露店から開放することが、当面の最優先課題とされた。

区プログラム・公道再整理局の主導の下、2007年1月から約9ヶ月間に渡る露店商グループのリーダーたちとの交渉の末、露店商グループを屋内型の商業センターへ移転させることで合意を得た。これと並行し、不法占拠された不動産や荒廃した不動産を収用・買収し、これを改修して、衛生的かつ安全な管理の行き届いた商業センターとして整備した。こうして、2007年10月12日には、66の露店商グループが用意された55ヶ所の商業施設へと移転されることになった。

ただし、全ての露店商が政府によって用意された商業センターに収まった訳ではなく、収まりきらなかったグループについては、露店整理対象地域内のアロンソ・ガルシア・ブラボ広場及びヒロン通り、若しくは露店整理対象地域外の公道へ移転させるという、一時的な対策がとられることとなった。



図-3 露店整理前（左）と露店整理後（右）のコレオ・マジョール通りの様子（ソレダー通り-モネダ通り間）

また、元露店商の中には、商業センターにおける経営に行き詰まり、再びトレロ（Torero：見張り役と売り子

からなるグループを組み、点々と場所を変えて当局の取り締まりを逃れながら、路上で商売する人々）へと形を変えて、路上に戻ってくる者も少なくない。

b) 小規模オープンスペースの整備

治安・交通など、個別の問題を抱える4ヶ所の地域に対して、小規模なオープンスペースをパブリックスペースとして整備することで、問題の解決を図るプロジェクトがACHによって計画された。当初計画された4ヶ所の内、2011年8月の調査時点までに、5月5日通り第1路地における緑化壁設置と、マンサナーレス礼拝堂前の小広場整備の2つが実施されている。前者の設計はACHが、後者の設計は土木局が担当した。

<事例1> 5月5日通り第1路地

旧市街中心部に位置する、この“く”の字型の路地は、旧市街で働く人々にとっての手頃な食堂街として長らく機能してきたが、屈曲部西側に面した立体駐車場の排気や騒音、グラフィティ、夜間の浮浪者による利用、ネズミの繁殖など、様々な環境問題を抱えていた。そこで、沿道の食堂の従業者・利用客にとって快適な環境を創出するとともに、観光客をも惹き付けるような安価で質の良い食堂街として再生する計画が持ち上がった。

プロジェクトの鍵として、路地にむき出しになっていた立体駐車場のファサードを緑化壁で覆い、歩行者の注意を惹き付けることで、閉鎖的だった路地へのアクセスを向上する方策がとられることとなった。計画から設計までの全プロセスをACHが担当した。



図-4 整備前（左）と整備後（右）の路地の様子

まず、沿道の食堂からの苦情もあり、路地の中央に設けられていた植栽を撤去し、これを平板舗装とした。次に、緑化壁の建設が行なわれた。緑化壁のデザインについては、ジャン・ヌーベル（Jean Nouvel）設計のケ・ブランリー美術館に設置された、パトリック・ブラン（Patrick Blanc）による垂直庭園が参照された。緑化壁の構造は、25m×14mの鋼製の構造体を、立体駐車場の躯体に設置した強化コンクリートの土台へアンカーで取り付け、そこに50cm四方のプランターを嵌め込む仕組みになっている。駐車場管理者の許可をもらって駐車場に固定

されているが、緑化壁自体はあくまでDF政府の公有財である。店舗が入っている駐車場低層部は、緑化壁で覆いきれなかったため、仕切り壁を設置した。駐車場に1,100ℓの給水槽を3台設置し、チューブを通じてプランターへ撒水する仕組みになっている。



図-5 緑化壁の設置によって景観が向上した路地

壁面緑化の工事に併せて、観光局によって、観光客向けの接客や食品衛生などに関する講習会が、食堂経営者に対して開かれた。また、経済発展局も食堂経営者をはじめとする沿道の事業者に対して、テナント修復のための低利子の融資プログラムを組み、下水に油が直接流れないようなキッチンの採用等、設備の充実を促している。

竣工から1年が経った2009年以降、プロジェクトはACHの手を離れ、FCHがフォローアップを担当している。FCHでは、テラスの天幕、テーブル、イスの統一されたデザインや、ファサードの整備等の景観整備を計画している。

飲食店従業者の多くは、プロジェクトに対して、路地の景観が向上したこと、歩行者通行量が増えたこと、集客が増えたことなどについて、肯定的な評価をしていることが筆者のヒアリング調査を通じて明らかになった。その一方で、当初課題の一つとして挙げられていた夜間の治安については、未だに解決されていない。囲繞感の強い閉鎖的な路地の構造上、食堂が閉店する夜間にはどうしても浮浪者の溜まり場となってしまおうようだ。

この点、もう一つの小規模オープンスペースの整備プロジェクト、マンサナーレス礼拝堂前の小広場整備事業は対照的な結果である。旧市街のフリンジにあたるこの礼拝堂一帯は、かつて売春やドラッグなどの犯罪行為の巣窟として悪評高く、著しく荒廃していた。しかしながら、僅かながら地域住民の信仰を集める礼拝堂の前面に、ポラードで囲われた領域性のあるモニュメンタルな空間を創出し、ベンチや植栽を配して広場としての性格を与えることで、夜間でも子供が安心して遊べる場所へと変貌を遂げている。



図-6 マンサナーレス礼拝堂前の小広場

(2) 歩行者回廊 (Corredores Peatonales) の創出

平日の日中をはじめ、慢性的な交通渋滞に悩まされてきた旧市街では、歩行者と自転車によるモビリティの改善と、公共交通機関によるアクセシビリティの向上は、長年の課題とされてきた。そこで、複数の歩行者専用街路を連結し、ひとつながりの歩行者空間を生み出すことで、旧市街内部の徒歩による安全で快適なモビリティを高めることを目的としたプロジェクトが計画された。

この歩行者回廊の創出という戦略自体は、前ロペス知事の時代に、ガンテ回廊、モトリア回廊という2つのプロジェクトにおいて既に実現していたが、エブラルド市政の歩行者回廊とは大きく性格が異なっている。

まず、ロペス市政の歩行者回廊が、経済業務地区・観光地区である旧市街西部においてのみ創出されたのに対し、エブラルド市政の歩行者回廊は、旧市街一帯を網羅する形で創出されている。また、ロペス市政のプロジェクトが歩行者専用街路の整備にとどまったのに対し、エブラルド市政のプロジェクトでは、広場と歩行者専用街路を一体的に整備することで、連続する一つの系としての新たなパブリックスペースのあり方が模索されたことも、大きな違いであると言える。



図-7 ロペス市政によって整備されたガンテ回廊

エブラルド市政は、前ロペス市政において整備が行なわれた旧市街西部をスタート地点として、半時計回りに旧市街を一周する形で、舗装や上下水道の補修、歩道の拡張等の街路整備を行なっていたが、歩行者回廊プロジェクトもこれに合わせて半時計回りで順次進められた。街路整備の進展に合わせて、広場や公共施設を結ぶルートを戦略的に設定し、これを順次歩行者専用化するという形で、2007年のレヒーナ回廊 (Corredor Regina) に続き、2008年にはアルオンディガ回廊 (Corredor Alhóndiga) 、2009年にはサン・イルデフォンソ回廊 (Corredor San Ildefonso) が整備された。最終的には旧市街を環状につながる歩行者専用街路のネットワークを形成することが目標とされたが、交通面などの現実的な問題から実現には至っていない。また、2010年には、旧市街西部を東西に貫通するフランシスコ・マデロ回廊 (Corredor Francisco Madero) が開通し、総延長3.2kmの計4本の歩行者回廊が誕生した。

プロジェクトはACHのコーディネートの下、AEPが計画・設計を担当したフランシスコ・マデロ回廊を除き、土木局が計画・設計を担当した。また、旧市街の交通改善事業の一環としても位置づけられていたため、運輸交通局も計画・設計に一部参与している。

以下、土木局が手がけた3つのプロジェクトの1つであるレヒーナ回廊のプロジェクトを例に、その計画・デザイン手法を分析する。

<事例2>レヒーナ回廊

レヒーナ回廊のプロジェクトでは、ビスカイナス広場、レヒーナ広場、サン・ヘロニモ広場の3つの近接する広場を東西に連結し、エヘ・セントラルから11月20日通りに至る東西約800mに渡る歩行者専用空間の整備が計画された。この一帯に、ソル・フアナ学院、ビスカイナス劇場、レヒーナ劇場をはじめ、文化・教育施設が多数立地する条件を活かして、学生や若いアーティストを惹きつけるような文化地区の創出が目標とされた。また、新たに呼び込まれた住民や活動が、既存の土地利用やコミュニティと共存することも重要な課題とされた。プロジェクトは、3つのセクションから構成されている。

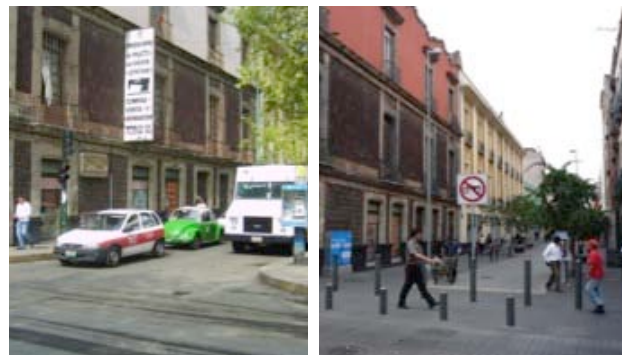


図-8 整備前 (左) と整備後 (右) のレヒーナ通り

西側の第1セッションは、ビスカイナス広場とビスカイナス劇場一带の街路を歩行者専用化することで、地区に一体感を与えることが目標とされた。しかし、アルダゴ通りに地下駐車場の出入り口が設けられていることや、沿道の建物へのアクセスが必要とされたため、実際に歩行者専用化されたのは、エチェベステ通りだけであった。



図-9 学生や近隣住民の憩いの場，ビスカイナス広場

中央の第2セッションでは、レヒーナ広場の整備とレヒーナ通りの歩行者専用化を一体的に行うことで、開放的で安全な歩行者空間を生み出すとともに、東西方向に伸びる多機能な軸を創出することが目標とされた。広場北側の車道は歩行者専用化され、広場の一部として取り込まれた。広場では、コンサートや展示会、インスタレーションなど、様々な用途に用いられることを意図したシンプルなデザインが施された。かつてレヒーナ広場の一面には水路が流れていたが、この水路へのオマージュとして、乾式の噴水が線状に設置された。広場の植栽については、既存の植栽が過密な繁茂のために弱っていたため、健全な大木のみを残して植え替えを行った。



図-10 開放感ある空間に生まれ変わったレヒーナ広場

東側の第3セッションでは、歩行者専用化と併せて、文化的活動、住宅の修復、カフェやレストランなどの新しいテナント利用を促進することが目標とされた。1985年の大地震で建物が倒壊して以来空き地になっていた土地を、遊具やバスケットコートを用意した児童公園として整備し、安心して近所の子供たちが遊べるポケットパー

クを創出した。このポケットパークの塀や、レヒーナ劇場脇の建物のファサードは、定期的に作品が書き替えられるキャンパスとしてアーティストに提供されている。



図-11 ポケットパークの入り口（左）と内部（右）

歩行者回廊プロジェクトのコンセプトは、第一に、歩行者と自転車利用者が優先的に移動できる空間の創出である。そこで、交差点内の車道部分にアンジュレーションを施すことで、車が減速するとともに、歩行者が段差なしに交差点を横断できる仕組みになっている。また、歩行者専用化とは言うものの、緊急時やメンテナンスの際には車両通行が必要とされるため、街路中央には、幅30cmの取水溝に挟まれる形で、幅員3.25mの緊急車両通行用のスペースが確保されている。この中央のスペースには、排水のための下水システムが埋設されている。こうした工夫は、他の3つの歩行者回廊プロジェクトにおいても同様に採用されている。



図-12 中央に緊急車両用のスペースを確保した断面構成

街路を構成するエレメントについては、既存の脆弱な植栽を撤去し、新たに41本の植樹を行うとともに、130個の2種類のベンチ、32本の街路灯、ポラード、緊急車両通行のための空気圧式ポラード、駐輪器具、ゴミ箱といったストリートファニチャーが設置された。舗装については、前ロペス知事の時代に頻繁に用いられたプリント式のコンクリートは使用せず、玄武岩質のプレファブリックの平板を用いて、計9,368㎡が整備された。ストリートファニチャーをはじめとする構成要素のデザインには、歴史的な環境に配慮しながらも、現代的な需要や嗜好に添ったデザインが施されるよう、細心の注意が払

われた。前ロペス市政のプロジェクトでは、植栽マス、ベンチ、照明柱、ボラード、ゴミ箱などのストリートファニチャーに対し、対象地域全体において極めて紋切り型の画一的なデザインが施され、エレメントをデザインする上で地区の特徴や個性、時代のニーズは重視されなかったが、これに対する反省として、歴史的環境保存の立場から事業の審査を行なう INAH、都市発展局の両機関も、レヒーナ回廊のプロジェクトにおける土木局の新たなデザインへの追求に、協力的な働きを見せた。



図-13 新たなデザインが試みられたストリートファニチャー

プロジェクトにおける住民との対話については、プロジェクトが実施される前から入念に行なわれてきた。ただし、これは地域住民の意見をデザインに取り組みするための市民参加ということではなく、住民に対する説明のための場として利用されていたようだ。

レヒーナ回廊のプロジェクトが生んだ大きなメリットとして、様々な機能や人々の共存が挙げられる。八百屋や織物屋、ベシンダー（馬蹄形の庶民向け集合住宅）といった既存の要素と、整備後に現れたカフェやギャラリー、タトゥーショップ、若い学生やアーティストなどの新しい要素が、お互い尊重しあって一つの場所を構成している。その背景には、2000～2005年にかけてメキシコ人資産家カルロス・スリム（Carlos Slim）の私設団体、セントロ基金（Fundación del Centro Histórico）が行なった、文化的回廊（Corredor Cultural）の創出と名付けられた、若者向けの住宅投資プロジェクトが大きく関わっている。こうした地区変貌の動きを理解し、ハード整備と合わせて周囲の住宅供給を促進したことや、アーティストに作品展示の場を設置したり、飲食店のテラス設置を許可したりと、新たな活動を呼び込むための下地作りを行なったことは、成功の大きな秘訣である。

こうして生まれた新たな住人と古くからの住人の間に、もちろん問題が全くない訳ではない。若者が多く暮らし、通うレヒーナ通り一帯では、週末の夜になると、パーティーをする若者たちが、通りへ出て騒ぐという事態が発生している。また、新たな住民の中に犬を飼う人が多いことや、治安が向上して夜も安心して歩けるようになったことを受けて、夜間に犬の散歩をする人が増え、犬の糞を放置する人々が増えている。

アルオンディガ回廊が開通したメルセー地区でも、歩

行者通行量が増えたことで、地区の路上で働く荷役人夫たちの活動が歩行者の妨げとなるとして、当局に取り締まれる事態が発生している。また、観光地区である旧市街西部に開通したフランシスコ・マデロ回廊でも、歩行者専用化に目を付けた大道芸人やストリートミュージシャンが連日大量発生し、通行妨害を理由に、当局に取り締まれるなどの弊害が発生している。こうした問題は、プロジェクト設計者の土木局やAEPが、整備後の空間の使われ方に対する明確なビジョンを持ってなかったこと、及び整備後の調整役を担当するFCHとの間に事前の連携が十分に取れていなかったことに起因している。

一方、FCHではこうした状況に対し、住民や事業主との協議を通じて必要最低限のルールや指導を行なうに留まり、過剰な規制管理を避け、利用者の意志を尊重する方向で規制管理を行なっているようだ。例えば、旧市街では歴史的環境を考慮して、公道上にテラスを設置することは基本的に禁じられているが、レヒーナ回廊ではテラスを設置したいという沿道の飲食店の要望を受けて、FCHはテラス設置にあたっての規則を作成し、条件付きでテラス設置を認可している。

(3) 広場の復旧（Intervención en Plazas Públicas）

2007年の露店整理によって旧市街の多くの広場が露店商の占有から解放されたが、長年、露店によって占有されてきたこれらの広場は、非常に荒廃した状態にあった。舗装はダメージを受け、植え込みや樹木は荒れ果て、ベンチは破壊され、十分な照明もない有様だった。そこで、荒廃した広場を整備して、広場本来のパブリックスペースとしての機能を取り戻すプロジェクトが、ACHによって立案された。

11の広場を対象としたこのプロジェクトは、基本的にはFCHが設計を担当している。ただし、歩行者回廊の一部にも位置づけられているレヒーナ広場、ファン・ホセ・バス広場、アルオンディガ広場については、歩行者専用街路同様に土木局が、AEPの基幹プロジェクトとして位置づけられているガリバルディ広場についてはAEPが、その設計を担当した。

a) FCHのプロジェクト

FCHが設計を担当した広場の復旧プロジェクトでは、新しい機能や設備を付加して広場を改修するのではなく、各エレメントを修復することで、広場を元の状態へ回復させることが基本方針とされた。舗装、噴水、彫刻、植栽といった広場を構成するエレメントの修復・清掃が一斉に行なわれた。また、整備にあたっては、障害者のアクセシビリティの確保が入念に検討され、スロープの設置などが行なわれた。歩行者回廊や小規模オープンスペース整備、AEPの基幹的プロジェクトなど、他のプロジ

エクトではドラスティックな空間の変化を遂げたのに対し、FCHのプロジェクトでは対照的にこのような慎ましい設計手法がとられることとなった。



図-14 コンセプション広場の整備前(上)と整備後(下)

メキシコでは、ポルフィリオ・ディアス政権期(1867～1910)に都市の近代化が進む中、噴水やキオスクを備えた植栽豊かな庭園的な広場のデザインが確立されて以来、こうした広場のあり方は大きな改変を受けることなく今日まで受け継がれてきた。FCHの設計思想には、近代的広場のデザインが市民の憩いの場としての広場の完成系であるという理解と、こうした広場のあり方そのものを歴史的遺産として評価する姿勢が伺える。かつて人気のなかったこれらの広場では、住民や買い物客を中心に、木陰でくつろぐ市民の姿が見られるようになった。

b) 土木局のプロジェクト

既に、<事例2>でレヒーナ広場の例に見たように、歩行者回廊の一部として位置付けられている3つの広場については、土木局が設計を行なったために、比較的新しいコンセプトやデザインが導入されている。

アルオンディガ回廊の一部を構成するアルオンディガ広場では、露店商によって占拠されていた広場を市民の憩いの場に造り替えるべく、植栽やベンチ代わりの石垣が新たに設置されるとともに、かつて広場を流れていた水路へのオマージュとして、水路を象った植栽と小さな橋が整備された。同じくアルオンディガ回廊に位置するファン・ホセ・バス広場でも、広場中央に広場を象徴するワシのモニュメントと噴水を設置し、植栽やベンチを新しいものと交換するなど、デザインが刷新されている。

これらの広場は、昼間は従業者や買い物客が行き交う通り道として、夜間は子供達の遊び場や地域住民のコミュニケーションの場として機能している。また、開放的な空間構成になっていることから、セマーナ・サンタ(イースター)等の伝統行事をはじめ、様々なイベントの会場としても利用されており、コミュニティの核としての機能を果たしている。

c) AERのプロジェクト

DF内のパブリックスペースの整備を担当する機関であるAEPは、旧市街において3つの基幹的プロジェクトを計画している。その内の1つ、ガリバルディ広場の整備は、広場の復旧事業の一つとしても位置づけられている。

<事例3>ガリバルディ広場

ゾーンA北西部のすぐ外側に位置するガリバルディ広場は、マリアッチ広場として広く知られ、夕暮れ時から夜中にかけて、メキシコの伝統的な庶民音楽であるマリアッチを聞きに、多くの市民や観光客が集まり賑わいを見せるメキシコを代表する盛り場でありながら、麻薬、売春、強盗などの犯罪や貧困を抱えた場所でもあった。そこで、マリアッチ広場及び大衆酒場としての場所のアイデンティティの復興をモットーに、広場の整備を通じて様々な社会的問題を解決するとともに、地域の観光業を振興する計画が、ACHのコーディネートの下で、AEPと観光局によって進められた。

まず、広場に地区経済のカンフル剤となる新しい施設を設け、広場一帯の経済活動が活性化されれば、事業主の活動や顧客の存在が環境の維持管理につながるものと考え、広場の西側にテキーラ・メスカル博物館が建設されることとなった。博物館は、1階にオフィスとホール、2階に展示室、屋上にテラスを備えた2階建ての鋼構造の建物で、テキーラ及びメスカルの原料であるアガベが描かれた半透明ガラスのカーテンウォールがこれを覆い、夜間は広場を照らすイルミネーションとして機能する。約1,500㎡の床面積の1/3に近い大きなピロティを設けることで、歩行者動線を確保するとともに、マリアッチに待ち合わせ場所を提供している。



図-15 テキーラ・メスカル博物館

一方、広場の改修に関しては、新たに設けられた求心的な施設を中心に、巨大な広場全体に多方向の人の流れが行き渡るよう、広場に接続する周囲の街路も一体的に改修された。特に、広場から東に伸びるホンジュラス通りでは、ビスタ景を演出する形で、メキシコの音楽スターの銅像やヤシの木が列状に並べられ、広場から伸びる

軸線としての性格が強調された。舗装には、120cm角の菱形コンクリートブロックが用いられた。植栽は、博物館に対峙する形でアガベの植え込みが中央に設けられた他、広場や街路を縁取るように、ジャカラランダやヤシの木が約70本植えられた。



図-16 テキーラ・メスカル博物館からの広場の眺め



図-17 整備後のホンジュラス通り

また、こうした観光地としての整備とともに、近隣住民の暮らしと観光業の共存も一つのテーマとされた。近所の子供たちへ安全な遊び場を提供するべく、ガリバルディ広場の南東に位置するモンテロ広場が児童公園として整備された。広場北東部の入り隅となっているアマルグラ路地は、その形状から広場の中でも最も治安に問題を抱えていた場所であったが、広場中央との一帯的な整備が行なわれ、安心して出入りできる空間へ再生された。



図-18 児童公園として整備されたモンテロ広場

広場の整備と並行して観光局では、広場一帯の不動産を購入し、整備によって経済的ポテンシャルが高くなった後に入手した不動産の内、7件を販売、7件を貸与することで、経済的なフィードバックを計画した。こうして

テナント利用が促進されたことは、市の収入源となっただけでなく、地区の環境維持にもつながっている。

ただし、プロジェクトを通じて環境改善・観光振興が実現した一方で、そのデザインについては批判する声も多い。例えば、広場の改修と博物館の建設にあたり、メキシコの伝統的な広場のエレメントであるキオスク及び柱廊を撤去するなど、場所のアイデンティティを損なうような大改造が行なわれている。また、計14,500㎡という広大な敷地の中で、空間の連続性とモビリティを重視し過ぎたあまり、空間を分節する装置に乏しく、全体として漠然とした印象の空間となっている。



図-19 整備の際に取り壊された柱廊

このように、社会環境の向上や経済活動の活性化といった効用の裏で、場所のアイデンティティやパブリックスペースとしての機能の一部を損なうようなデザインが施されていることは、ガリバルディ広場の整備に限らず、AEPの基幹プロジェクト全てに共通して指摘される問題点である。共和国広場の事業では、歴史的モニュメントである革命記念塔の中空部分にエレベーターを設置して、これを展望台として利用する、フランシスコ・マデロ回廊の事業では、歴史的建造物が沿道に林立する中に安易なデザインの植栽マスやベンチを路上に設置するなど、そのデザインのあり方は疑問の余地が残るところである。

4. プログラムの成果と課題

(1) 成果

以上、エブラルド市政の旧市街再生に向けたオープンスペース整備プロジェクトについて、具体的な事例を参照しながら、その成果を検証した。参照すべき前例に乏しい大規模な再生事業ということもあって、各プロジェクトはまさに試行錯誤の中で進められてきたと言える。当然の事ながら、如何なる計画やデザインにも正解は存在しなければ、100%完璧なプロジェクトなどというものも存在しない。整備後にいくつか個別の課題は残されたものの、プログラム全体としては、パブリックスペースの再生、治安の向上、観光・文化の促進、居住の促進な

ど、総合的な再生に大きな効果があったと評価される。こうした一連の功績を受け、エブラルドは2010年のWorld Mayor Prize (<http://www.worldmayor.com>)にも選ばれている。

一連の施策が功を奏した前提として、まず、エブラルド市政が任期の早い段階で、露店整理を成功させたことが注目される。これによって、歩行者回廊の創出や広場の復旧といったハード整備プロジェクトが可能になったのである。露店整理が成功した背景としては、エブラルドが1993年の政府局在任時代や、2000～2005年の公安局在任時代に、露店整理に関するノウハウを身に付けると同時に、露店グループのリーダー達との間に密接な関係を築き上げていたというアドバンテージが考えられる。

再生プログラムの核であるオープンスペース整備の戦略として、点としての広場や小規模オープンスペースの整備と、それをつなぐ線としての歩行者専用街路の整備を組み合わせることで、オープンスペースのネットワークを構築したことも注目される。レヒーナ回廊を例にとると、それまで孤立していた3つの広場が歩行者専用街路を介してつながることで、地域一帯が1つのパブリックスペースとしての機能を獲得したと言える。

ハード整備に合わせて観光局や経済発展局などの機関が、住宅供給や文化促進などのソフト面で連携したことも、エブラルド市政のプロジェクトが多部門かつ広範囲に渡る、総合的な再生へと結実した背景として注目される。観光地としての復興を果たしたガリバルディ広場や、文化地区を形成したレヒーナ回廊は、ソフトとハードの複合的な戦略が成功した典型例であると言える。

プロジェクトの計画・設計に関しては、ACHのコーディネートの下で、FCH、土木局、AEPが段階的な分業体制をとったことで、プログラムの一貫性を保ちながら、場所のコンテキストとニーズに応じた多様なデザインを実現することができたと言える。広場の復旧プロジェクトを例にとると、広場の立地条件や歴史的なストックに応じて、FCHの庭園型のデザイン、土木局のモニュメンタルかつ現代的なデザイン、ACHの機能的なデザインという異なるデザインが使い分けられている。

(2) 課題

エブラルド市政のプログラムの根本的な課題として、まず、対象地域の設定が挙げられる。プログラム対象地域の設定は、国の歴史的モニュメント地区ゾーンAに大きく依拠しているが、これはあくまで歴史的視点に基づいたゾーニングである。従って、旧市街北部のラグニージャ地区をはじめ、都市構造としてはひとつつながりで、同様の問題を抱えているにも関わらず、再生プログラム対象外とされたことで、これらの地区では、依然として

治安や都市景観などの問題が未解決の状態にある。

また、ハード整備後の空間の具体的な使われ方に対するビジョンが不足していたために、プロジェクト終了後に予期せぬ社会問題が発生し、対応を求められるケースも少なくないようだ。特に、参照するべき事例に乏しかった歩行者回廊プロジェクトや、大規模な改修を伴ったAEP担当プロジェクトでは、整備後の柔軟なフォローアップが求められていると言える。このような事態が発生した背景として、独立200周年及び革命100周年を迎える2010年までにハード整備を終わらせるという目標に追われ、急ピッチで計画・設計・施工が進められたことが指摘される。

さらには、2007年の露店整理によって一件落ち着いたかのように見えた路上のインフォーマル商業についても、根本的な解決には至っていない。メキシコ・シティにおいて、路上の商売は植民地化以前から連綿と続けられてきた営みであり、強権的な方法で排除するのは得策でないと言える。今後、一連のプロジェクトを通じて得られたパブリックスペースとしての都市空間の質を損なうことなく、商業活動が共存できるような方法を模索する必要があるだろう。

2011年8月現在、DF政府ではACHを中心に「旧市街総合管理計画2011-2016」の策定に向けて動いている。メキシコでは、政権交代とともに大々的な政策転換がしばしば図られるため、オープンスペース整備をはじめとする一連の再生事業の効果を持続させるとともに、残された課題を解決するべく、ACHを中心としたソフト中心の柔軟な管理体制の将来的なプログラムが求められている。

謝辞：ロシオ・ロペス博士 (UNAM)、リカルド・ハラル氏 (ACH)、ビセンテ・フローレス氏 (FCH)、アレハンドロ・マルティネス氏 (土木局)をはじめ、本研究にご協力を頂いた方々へ、この場を借りて厚く謝意を表す。

参考文献

- 1) 東京大学 cSUR-SSD研究会：世界のSSD100-都市持続再生のツボ、彰国社、2008
- 2) Mesías Gonzalez, R., Suárez Pareyón, A.: Los centros vivos: Havana, Lima, México, Montevideo, pp. 99-122. CYTED, Mexico, 2002
- 3) Hardoy, J., Gutman, M.: Impacto de la urbanización en los centros históricos de Iberoamérica, Mapfre, Spain, 1992
- 4) Hall P.: The World Cities, Weidenfeld & Nicolson, London, 1984
- 5) González, M., Torres Medina, J., Jiménez, O.: La República Informal: El Ambulantaje en la Ciudad de México, Porrúa, Mexico, 2008
- 6) Fideicomiso Centro Histórico de la Ciudad de México: Memoria de Actividades 2002-2006, Mexico, 2006
- 7) Aguirre C., Dávalos, M., Amparo, M.: Los espacios públicos de la ciudad siglo XVIII y XIX, pp. 314-334, Casa Juan Pablos, Mexico, 2002
- 8) Vergara Durán, A.: Renovación de centros históricos en grandes ciudades latinoamericanas: repercusiones socioeconómicas, urbanístico-estructurales y medioambientales-urbanas, Uninorte, Colombia, 2008